

梅鶯仏教壮年

第15号
2004年
9月12日

9月例会は本山参拝親睦旅行

9月24日(金) 15時出発
25日(土) 15時帰着
《1泊1日》

今からでも参加は可能です。是非一緒にして下さい。お待ちしています。

□西本願寺・書院

「お西さん」と親しみをこめて呼ばれる西本願寺は、世界文化遺産の指定を受け、国宝や重要文化財を数多く有する宝庫でもあります。

今般の親睦参拝旅行では、普段は見ることのできない書院の内部も拝観させていただきます。

そこで、国宝・重要文化財の建物を中心に少しご紹介を申し上げます。

○阿弥陀堂

ご本山の総門を入りますと、大きな御堂が二つ、そびえるように建っています。その北側の建物が、西本願寺のご本堂であります。



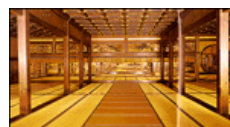
○御影堂

そして、南側の建物が御影堂で、親鸞聖人の御影像が安置されていますが、現在、平成の大修復中であります。

○書院

桃山文化の粋(すい)

を極めたといっても過言でない国宝の建物が本書院で、御影堂の南側に位置します。書院の中には国宝・重要文化財に指定された多くの



建造物の他、絵画や彫刻など桃山文化を伝える最高の名人・達人の作があり、また名勝の庭や、日本で最も古い能舞台などがあり、実に見ごたえのある書院です。



○唐門

ご本山の南側の長い堀の内にある門で、規模の豪壮さ、形態の重厚さ、装飾の華麗さで日本にある唐門の中で最高のものといわれています。日暮れを忘れてみられるところから「日暮門(ひぐらしもん)」



も呼ばれます。

○飛雲閣

しばしばテレビなどで紹介されることのあ
る有名な飛雲閣は、ご
本山境内の東南の隅に
あります。

金閣、銀閣とともに

天下の三閣と呼ばれ、滴翠園(てきすいえん)と名付けられる名高い庭園の中に、滄浪池(そうろういけ)に臨んで建てられています。



以上、大変おおざっぱな紹介であります。詳しくは法輪寺前住職長野隆法が1998年に著しました『蓮如上人と本願寺書院』を参照していただきたく思います。

本書は現在でも本願寺で販売されていますが、既に皆様方にはご進呈いたしておることと存じますので、是非お読みいただきたく願います。

\$

名月や池をめぐりて夜もすがら

蕉
*法友との秋の芭

題材法話

○味わいの世界

「仏さまのお話をしつかり理解しなければ救われな
い」という思いは、阿弥陀
さまを頼りにしているよう
で、実は自分自身を頼りに
している世界であり、自分
自身が納得しなければ、阿
弥陀さまを信用できないと
いう思い上りの世界である
ということ、前号でお話
しました。

つまり、親の限らない慈
愛を受け止める子供の世界
は、理解の世界ではなく、
「味わいの世界」として真
実の世界があるということ
です。

○我が計らいを超えた世界

阿弥陀さまのご本願は、
ちようど親が子を思う世界
なのです。煩惱具足の私達
を心底悲しんで、我が子よ
なるとか救われてくれ、我
が願いに包まれてくれ、
下さっているのが、



「南無阿弥陀仏」であり、
私側の計らう世界ではない
のです。

人間の世界の願いとは
違い、人間の親の願いは
が、あります。どれほど真
心を持ってしても必ずその
願い通りになるとは限り
ません。ところが阿弥陀様
の願いは完全なものです。
慈悲の世界であり、知恵
の世界なのです。そのこと
に気付かせていただくのが、
実は聞法なのです。

○あるおばあさんのお話し

ある念仏者のおばあさん
のエピソードです。
この方は若いときから熱
心に聞法を重ねられ、お寺
でござ座があるたびに、出
けられておられました。熱心
にお説教のあいだ中、熱心
にメモを取り、法座が終わ
れば、講師さんの控え室へ
出向き、あれやこれやと質
問をなされる。あまり熱心
なので講



師も少しうんざりするくら
いだったそうです。ところが
が周りから見て、どうもあ
まりお念仏を喜んでおられ
るようには見えなかったそ
うです。

ところが、ある時、いつも
の説教者がお説教中にそ
の、おばあさんの様子を見
た、悦びが溢れている。そ
れだけ熱心にとっついて、
あれだけ熱心にとっついて
メモはとらず、お説教が終
わっても、一向に部屋に
る気配がない。

そこであまり気になるの
で、今度は講師の方から、
「おばあさんと呼ばれて、
の、おばあさんと呼ばれて、
か」とお聞きになられたそ
うです。そこで、そのおば
あさんは言われました。

「講師さん、今までこのば
ばは、お説教を聞いてなん
とかお念仏のみ教えを分か
ろうとしておりまして、か
きまじく分かつた。そこで、
分かつたのかと聞くと、
「わたしの必要の呼び声
親の一人働きの方で分



であつたと、ようやく分か
らせていただいたんです。
「こんなしづいばを諦
めもせんと呼び続けておっ
て下さった親様を思うと、
申し訳ないとともに、嬉
しゅうてならんのですわ」
ということだったそうです。

○聞くつもりが、聞こえる世界に

聞こう聞こうとしていた私
でしたが、いつのまにやら、
阿弥陀の呼び声が聞こえる世界
へと変えられてきたのです。
これが聞法ということなので
すね。

「聞法」とは「間違いない聞
くことよ」。「間違いない聞
くこと」とは「間違いない聞
まいたたくことじやて」とい
うある和上の言葉がありま
す。

聞法とは、「分かる」とす
る世界でも、「分からなくと
も良い」とする世界でもな
く、ひたすら親（阿弥陀様）
の呼び声を聞くなかで、この
私が親の願いの中に包まれ
ていたことを喜ぶためのもの
です。

